

荒縄 S M 文庫

# 隷徒 2

## 姉妹の章



あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でS M小説を執筆。独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

## 目次

これまでのあらすじ	8
主な登場人物	10
目撃者	11
裏の顔	33
お口で	49
しごき	70
穴特訓	98
実験用	107
大洪水	128
バナナ	152
未熟者	162

奥付	306							
奥付イラスト		304						
シリーズ紹介			302					
イラスト	300							
狂姉妹	269							
晒し尻	246							
夜明け	237							
闇の宴	213							
放課後	190							

表紙・奥付のイラスト提供

月工仮面「極彩色の雨」

<http://gekkoumask.blog14.fc2.com/>

---

## これまでのあらすじ

### 「隸徒1 聖香の章」

引っ越してきた聖香は母の仕事を世話してくれている奥沢社長の紹介で、「就職率一〇〇%」で知られる名門・荒縄学園に転校した。

もともとマゾっけのある聖香は、転校初日というのにお尻に恥ずかしい落書きをし、ノーパンで登校する。学園の秩序を守るエリート部隊チームAにマークされてきた聖香は、さっそくチエツクされる。千晶は一度は見逃してあげようとするが、翌日もまた恥ずかしいかつこうできた聖香を見限り、告発する。

学長は「すぐ退学するか、隸徒か」と迫った。この

学園ではひたすら教員や学生に奉仕して卒業する隸徒という制度があつたのだ。

母に迷惑をかけたくないと聖香は隸徒になることを選んだ。

しかし、それは聖香が思った以上に過酷な日々となつていった。学長と奥沢社長に処女を捧げ、その後は教員や学生たちに性の奉仕をし続ける。

もつとも恐ろしいのは学園内に四か所設置された懲罰台である。

さつそくその洗礼を受けた聖香は、二度と懲罰台だけは避けたいと願っているのだが……。

## 主な登場人物

花沼聖香 変態妄想癖の学生。

翔子 聖香の姉。専門学校学生。

佐恵子 聖香、翔子の母。

シングルマザー

奥沢社長 奥沢工業の社長。荒縄学園のOB。学園の後援者。町の有力者。

克也、圭俊、一毅、健介、千晶

チームAのメンバー。チームAは代々、先輩から推薦されて選抜される成績最優秀な学生たち。学園の秩序・環境維持のための活動をする。隸徒の管理も担当している。

## 目撃者

「すごいわね。こんなに朝早く行くの？」

姉の翔子に声をかけられました。

「ちよつと、いろいろやることがあつて」

「ふーん」

姉の目を逃れるように、裸の上に制服を着て、私は学園に行きました。

朝早くても、千晶は門で待っています。

「いい心がけだわ。昨日は水着があつたけど、ボロボロになつちやつたから、今日から全裸よ。できる？」

とうとう、その日が来たのです。

「そもそも、隸徒は学園内では基本、全裸なんだから

ね」

「はい」

「これを貸してあげる」

使い古しのビーチサンダル。

制服やカバン、靴下を脱いで鍵のかかる箱に入れま  
す。靴も脱ぐのです。

「いいわ。かわいい」

千晶に抱きしめられました。彼女の制服のボタンが  
肌に食い込みます。だけどその痛みを彼女は理解でき  
ないでしょう。

鞭でつけられた傷はなまなましく、彼女の服が擦  
れるだけでも辛いのです。

何人かの学生が、登校してきています。みんなあたりまえに制服をちゃんと着ているのに、私だけ裸。手で隠そうとすると千晶に怒られるので、手は頭のうしろで組みます。

「隸徒の持ち物検査しまーす」

「ああん」

反抗はできません。だけど、ため息が出てしまいます。いきなり隸徒としての朝を叩き込まれるのです。

恥ずかしさで頭が破裂しそう。

千晶がボールペンで私を点検していきます。口を開け、鼻の穴まで覗かれます。

「もつと足を開いて！」

あそこは自分の指で開いて、ボールペンの鋭い先端を受け入れます。千晶は乱暴に粘膜を突き刺して、ビラビラをなぞり、クリのあたりも手加減せずに突っつきます。

「ふええええ」

指で粘膜を広げているので、そこがヌメヌメしているのがわかります。

「向こうを向いて」

お尻を自分から広げて、穴を見てもらいます。

「うっ」

ボールペンが排泄器官の奥深くまで入り込みます。

「朝、トイレ行った？」

「いいえ」

「保健室が楽しみなのね？」

時間がないからですし、できるだけ早く学園に逃げ込みたかったからです。家にいたら、母や姉になにか余計なことをしやべってしまいそうで怖いのです。

首輪をつけられ、鎖を千晶が持ち、「なかなか従順でいいわ。聖香も隷徒らしくなってきたじゃない」と誉められました。

「聖香。私だって、あなたを鞭で叩いたりしたくないの。これからは、ちゃんと言うことを聞くのよ」

「はい」

千晶が私を保健室に引っ張って行こうとしたときで

す。

「聖香！」

悲痛な叫び声が校門から聞こえてきました。

振り返ると、そこに姉の翔子が立っていました。

「おねえちゃん……」

顔面蒼白の姉が、駆け寄ります。

「なにをやってるの！」

千晶を突き飛ばしました。

「だめ！ おねえちゃん！」

私は姉にすがりつきました。

「早く、服を着なさい。そんなかつこうをして」  
怒っているのです。

「ちがうの。これは隸徒だから……」

そう言ってわかってくれるわけもないのですが。

そこにチームAの一毅と健介がやってきました。

「学園に許可無く侵入して学生に乱暴を働いたぞ！」  
と怒鳴り、姉に飛びかかっていきました。

「なにするの！ 悪いのはそっちよ！」

「うるさい、黙れ」

姉は彼らに殴られ、蹴られ、たちまち地面に叩き伏せられました。あまりにも素早く、あまりにも乱暴です。私は呆然としていました。

千晶はケガはないようで、服からホコリを払うと、再び私の鎖をしつかり手にしました。

「このことは、あとで諮問にかけることになるわ」

姉は一毅たちに腕を取られ、背後から首に腕を巻き付けられながら、歩かされます。

「離しなさい。なにをやってるの。あなたたち、自分たちのしていることがわかってるの！」

姉は叫んでいます。が、学園のほかの人たちは無視。チームAが動いているので、関わりたくないのです。

それに、隸徒のことなど、彼らにはまったくどうでもいいこと。大事なのは自分の卒業と就職です。就職率一〇〇%だから彼らはここに来ているのですから。そしてここで落ちこぼれたら、この街では誰もアルバイトでも雇ってくれないことも知っているのです。そ

れぐらい荒縄学園は、この街で重要な存在になっているのです。

一毅たちは姉を学長室へ連れていくようです。

私は保健室に連れていかれました。

「おねえちゃん！」

「聖香！」

姉はどうなってしまおうのでしょうか。

ですが、私はまた台に固定されて、内海先生に浣腸をされ、お尻の穴を広げる訓練を受けるのです……。

私はどうなったっていいのです。自分でお尻に「マゾ娘」と書くような女なのですから。

だけど、姉はまったく関係ありません。

「うぐぐぐぐ」

昨日よりも強烈な浣腸です。

「ふふふ。今日はおまえのために特製の浣腸液を作つてやったからな。うんと苦しめばいい」

内海先生はうれしそうです。

「ひー、つらい……。お腹が燃えてるうう」

内臓が発火しているようです。

「なにを言うんだ。おまんこから汁がダラダラ流れてきているぞ。隷徒らしくなってきたじゃないか。どんなときにも、穴を差し出して、犯してもらおう。それが娯楽用隷徒なんだからな。二リットル、たっぷり味わえよ」

お腹がパンパンになるまで入れられたのですが、本当の苦痛はそこからなのです。

激しく暴れる腸内。ビクビクとするお尻の穴。

そこに、内海先生はゴム製の太い棒を押し込みました。

「腸の中で膨らむから、漏れないし、拡張にもなる」

「ああああ」

叫ぶしかありません。

お尻が張り裂けてしまいそうです。

「いいねえ、聖香。苦しいか？ 脂汗が出ているぞ」

「苦しいです。お願いです。出させてください」

「ダメだ。こんな状況でも、おまえのおまんこはドロ

ドロになっている。ということ、男を受け入れることができないわけだな」

「や、やめてください」

「隷徒は拒否できないんだぞ」

「ううううう」

先生がズボンを脱いで、下半身を密着させてきました。

「入れてやる。ほしい、ください、と言え」

どんな命令にも従うのが隷徒。逆らってはいけない

……。

「先生のオチンチンがほしいです。聖香にください」  
泣きながら言いました。

「よし。やろう」

浣腸液でパンパンなので、そっちは押されて潰れて  
いるのです。そこに、ねじこんできました。

「いいねえ。ウォーターベッドのようだな」

お腹を揉みながら、先生は私を犯すのです。

「ぎひいいい」

「感じるか？　どんな苦痛でも感じるようになるぞ。

酷い目にあえばあうほど、濡れて淫らになっていくん  
だ。どうだ、きついか」

「はい」

「こうしてやろう」

先生が乳首に吸い付きました。

「きいいいい」

食べられてしまうぐらい、強烈に吸うのです。

「いまに、ここから母乳を出すようになるぞ。そうすれば、もつと喜ばれる。もつとオツパイを大きくして、いっぱい母乳が出るようにしてやろうな」

先生の固い指で力いっぱい揉まれ、握り潰されます。学生たちのほうが優しいぐらいです。

「いくぞ、聖香」

先生は私の中に射精してくれました。

「ハハハ。気持ちいいか？」とお腹を撫でます。「じやあ、こっちも抜いてやろう」

シューツと空気が抜けて棒が細くなつて、ビュツと

飛んでいきました。お腹の圧力がすごくて、長い排泄が続きます。その間、先生は横にいてお腹を揉みしだくのです。

「全部、出すんだぞ」

終わったと思っても、まだ出てきます。

「恥ずかしい体だな」

二つの穴を含めて、ホースの水で体を洗われました。

「明日も来なさい」

「はい」

泣きながらようやく許されたのですが、迎えにきた千晶がニヤニヤしています。

「おまえ、声が大きすぎるんじゃない？ 学長室にま

で聞こえてきたわよ」

「あつ」

そこには姉の翔子がいるはずですよ。

「来なさい。諮問を始めるから。おまえのお姉さんのおかげで大迷惑だわ」

「すみません」

学長室に連れていかれると、学長と奥沢社長、そして二人の先生がいました。私のあとから、内海先生もやってきました。

「私は講義があるから」と千晶は鎖を内海先生に渡して、教室へ小走りに行ってしまった。

姉の姿がないので、ホツとしたような不安なような、

不思議な感じがしました。

「聖香はそこにつないでおいでくれ」

内海先生は鎖を入り口近くの金具に取り付けました。

「どういう処分がいいか、ご意見をうかがいたいので  
す」と学長がはじめます。

「この聖香の姉の翔子が、学内に乱入し、チームAの  
メンバーである千晶君に乱暴を働きました。こんなこ  
とが許されていていいでしょうか」

「もちろん、ダメだ」と先生方も言います。「学園の  
平和が乱されてしまう」

内海先生も「由々しき事態だな」とつぶやいていま  
す。

しばらく学長や先生方が、姉のやったことを非難していました。

「まあまあ」と口を開いたのは奥沢社長です。

「この聖香もそうです。姉の翔子はなかなかの美貌で、私はずっと目を掛けてきました。いまは学校に通っていて、いずれ私の会社で働いてくれると期待していたのです。ですが、今日の一件を聞いて、正直、がっかりしました。暴力に出るとはね。見た目ではわからない狂暴さがあるのかもしれない」

そんなはずはないのです。

自分の妹が全裸で、首輪をされて、秘所にボールペンを突っ込まれていたなら、どんな家族でも逆上するで

しよう。

「私の提案は、翔子を隷徒にすることです」

「だめ！ やめて！」

私は思わず叫んでいました。

でも、先生たちは無視です。

「しかたありませんな」と学長が言います。「ですが、うちの学生ではないのですがね」

「かまいませんよ。実はこの翔子には聞きたいこともある。本当にマジメに専門学校に通っているだけなのか、と」

奥沢社長が妙なことを言います。

「なるほど。あれだけカワイイんだから、男性とのよ

からぬ交流があってもおかしくはないですな」

「自分の不純をさしおいて、妹の純粹さを信じたいと思うものなのです。この聖香は、自分からマゾ娘だと宣言していた。転校初日から下着をつけずに登校したのだ。おまけにケツの写真をブログに掲載するといった破廉恥極まりない娘だったわけだ。その姉にも、なにかしら問題があるとしても驚きませぬね」

「聞いてみるしかないか」

「普通の聞き方ではわからないものだ」

「しようがないですな」

学長の携帯が鳴った。「わかった」とうなずいた。「準備が出来たようなので、娯楽室へ移りましょう」

どうということ？　なんで娯楽室なの？

私も連れていかれたのです。

講義がはじまり、静かな学園です。

泣きたくなりました。姉の悪口を言われたりするの  
はこたえるものです。私が悪いんです。だけど、もう  
戻れません。

娯楽室のドアを開けると「やめてよ！」と姉の声が  
しました。

見ると、懲罰台に磔にされた姉がいました。今日は  
セーターとスカート、ブーツという姿ですが、そのま  
ま私がやられたように、金属の爪で手足の自由を奪わ  
れているのです。

「ここは防音室なのでね」

背後でドアが閉められました。大きなハンドルを半回転させると密封されるのがわかります。

だから、ここにも懲罰台があるのです。

「翔子と言ったね。どうしてうちの学生に暴力をふるったんだ？」

「だって、妹が……」

姉は私を見ました。

私は入り口にある金具に鎖をかけられて、立ちすくんでいます。

「聖香。逃げて。早く、ここから出るのよ！」  
なにも言葉が出ません。

## 裏の顔

奥沢社長は、姉の翔子の前に立ち、涙に濡れているその顔をまじまじとみつめています。

「翔子。おまえは、あの隸徒の姉だな？」

「そうです」

「どうして学園に来たんだね？」

「聖香の様子がおかしいから……」

「ふーん。どう、おかしいんだ？」

「転校したばかりで、最初の日からなんだかいつも聖香とは違っていたし……。だけど、こんなひどいことになってるなんて……」

奥付

お読みいただき

ありがとうございます。

二〇一三年九月刊行 二〇一八年二月二版

著作権 あんぷらぐど (荒縄工房)

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 SM研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。